



2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です



一般社団法人地域連携ネットワークみえ

三重県伊勢市御薮町長屋1963

(株)エホリューション内 (☎0596-63-5080 FAX0696-65-7006)

E-mail info@3c-mie.net

<https://3c-mie.net/>



立冬を過ぎ、肌寒さを実感する季節となってきましたが、世界では心が凍えるようなニュースが毎日報道されています。日本では少子化が問題となっていますが、何物にも得難い子供たちの命が奪われる所業が平然と行われていることには言葉を失います。こうした中で、持続可能な社会をつくるという世界の約束が達成できるのでしょうか。と、嘆いてみても仕方ありませんね。私たちにとって必要不可欠なものは、食の世界です。それを担う農業において持続可能な取り組みを指導されている県立明野高校の西先生に今回は、投稿をいただきました。また、町役場の共通課題を解決しようとする静岡県伊豆半島の2町の取り組みを紹介します。

明野高校式 持続可能な循環型農業 への取り組み！

～これからの循環型農業は地域の企業を巻き込んで地域の無駄を有効活用～

【連携している企業・団体】

- 株式会社マスマ
- 有限会社伊勢屋精肉店
- 有限会社二軒茶屋餅角屋本店
- 有限会社内藤製館所
- 河武醸造株式会社
- 有限会社みよしや
- 井村屋株式会社
- 有限会社藤屋窓月堂
- 南勢糧穀株式会社
- 三重大学



明野高校 生産科学科
教員 西 恭平



写真3 酒まんじゅう



写真1 純米吟醸明野さくもつ



写真4 SUSTAIN BEER 純環



写真2 あらら



写真5 伊勢あかりのぼーく

三重県立明野高等学校で農業教員をしております西恭平と申します。今回は、私が考える持続可能な農業を題材に、私が明野高校で実際に取り組んでいる「明野高校式持続可能な循環型農業」についてご紹介させていただきます。

タイトルにもあるように、これからの循環型農業は、農業界単体で取り組むのではなく、地域企業(特に食品関連企業)と協力をしてWIN-WINの関係性を築くことが大切であると考えています。本校では、養豚と稲作分野を中心に地域企業と共に、持続可能な循環型農業に取り組んでいます。(上図参照)

図の下方、酒米「弓形穂(ゆみなりほ)」を起点に解説します。弓形穂は三重大学生物資源学部が開発した三重の新品種の酒米で、2019年から本校の水田でGLOBAL G.A.P.(農場生産工程管理)に則って栽培を行っています。それを活用し、河武醸造株式会社と協力することで、図の右上、弓形穂を活用した本校オリジナル日本酒「純米吟醸明野さくもつ」を生産しています(写真1)。その弓形穂を栽培する過程において、出荷規格に適合しない米がどうしても排出されます。この等外米の活用を目的に2020年、南勢糧穀株式会社と協力をして図の右下、酒米のあられ菓子「あらら」を開発しました(写真2)。

また、日本酒の製造過程においては、酒粕が排出されます。搾り取って間もない酒粕は食品として活用することができるため、図の右、藤屋窓月堂と共同開発した酒まんじゅう(写真3)や、図の中央のISEKADOと協力して、本校オリジナル麦酒「SUSTAIN BEER 純環」(写真4)を開発しました。時間が経ち、茶色くくすんだ酒粕は、地元食品関連会社から排出されるせんべい粉、菓子屑、小豆皮や麦酒製造で排出されるモルト粕とともに、本校で生産している豚「伊勢あかりのぼーく」(写真5)の飼料(エコフィード)として活用をしています。

そして、「伊勢あかりのぼーく」の排泄物を弓形穂のモミガラとともに本校の堆肥舎で約3ヶ月発酵させて堆肥を作り、本校では、この堆肥を弓形穂の肥料として活用しています。

これらの取り組みによって、関連企業としては、産業廃棄物の処理代を抑えられるとともに、SDGsに関する強いコンセプトを活かした商品をラインナップすることができ、開発した商品から収益を取ることが可能となります。

また、本校としては、飼料や肥料代の削減につながることはもちろん、エコフィードの給餌によって、豚肉の脂身の融点が下がることから、口溶けがよく環境にも配慮した豚肉としてブランディングや、等外品の活用をコンセプトにしたブランディングによって、本来廃棄される農産物から収益を得られる仕組みを構築できました。このように、これからの持続可能な循環型農業は、それぞれの強みをつなぎ合わせて取り組む手法であるので、単体での大きな初期投資が必要ありません。

経営的にも負担が少なく取組めるため今後の農業には大切な視点であると私は考えています。



静岡県伊豆半島の2つの町役場を訪問、地方における課題対応を学ぶ！

全国に743の町役場が存在するそうですが、それぞれの課題には地域特性があるものの、ほとんど同じ内容ではないでしょうか。本県は15町、静岡県は12町ありますが、この度、ネットワーク情報交流会活動の一環として度会郡4町のメンバーが、伊豆半島の先端にある南伊豆町、松崎町を訪問し、それぞれ地域活性化に取り組まれている活動について現地研修を実施いたしました。

両町は、度会郡内4町と人口や高齢化の状況もよく似ており、地域環境も海から山にかけて酷似しているところがあります。早朝に車で出発し、南伊豆町には夕刻に対応いただき、翌日は末崎町に朝一番に対応いただくなど、正に弾丸視察の行程でした。地域は違っても同じ役場仲間として対応いただき、こころから感謝です。

松崎町役場にて



南伊豆町役場にて



“松崎町”は、人口5,851人、高齢化率は49.9%、桜葉(全国シェア70%)、わさび、天草、川のりなどを特産品とする町です。

同町も人口減少による課題として、地域コミュニティの衰退、人のつながりの希薄化、公共交通の衰退、耕作放棄地の増加、空家・空地の増加などが深刻です。

そこで、「健康人口を増やす。出会いから出産・育児まで支援する。交流観光数を増やす。移住・定住を促進する。起業・創業を支援する。防災力を強化する。」ことを課題対策としています。

“南伊豆町”は、人口7,569人、高齢化率48%、山林面積80%の伊豆半島の先端にある町です。

同町では、地域の人と資源を活用し、古から交流のある東京都杉並区と連携した都市と地方の連携による地方創生の実現を図っています。

都市部の高齢化対策として、杉並区、南伊豆町、静岡県が取り組んだのが、介護老人福祉施設「エクレス南伊豆」です。杉並区が保有していた南伊豆町内の土地に建設し、杉並区からは約40名が入居されています。



松崎町は、地域づくりの新たな挑戦として「2030松崎プロジェクト」に取り組まれています。

この目標は、①次世代と住み続けられるまちを共に築く。②サステナブル・ツーリズムなど新しい観光の可能性を目指す。として、町の望ましい姿を描き実現するバックキャスト方式で対話を重視したチーム活動で取り組まれています。現在、ゴール(目標)設定した18のチームが活動されています。当初は、各チームに静岡大学の教員がそれぞれ入って取り組まれていたそうです。

また、内閣府地方創生推進事務局広域連携SDGsモデル事業として、美しい村とデジタル村民をつなぐ共生型地方創生プラットフォーム「美しい村DAO」でデジタル村民証NFTの発行など地方創生の輪を広げる取り組みをされています。



伊豆半島から見る富士山

<後記>

地方での課題に対しては、各町で様々な取り組みがありますが、単独で実行していくには、限られた人的資源の中では相当難しいものがあります。

今回の両町の活動でも産学官での協力とご縁でのつながりが大きな役割を果たしています。

ネットワークは大切ですね！

日本版CCRC構想は、東京圏をはじめとする大都市の高齢者の地方移住支援や健康でアクティブな生活の実現などを基本コンセプトとするものですが、南伊豆町は、当初、CCRCのR(リタイアメント)のない新たなコミュニティをつくっていこうということになったそうです。

同町の「生涯活躍のまち」づくり構想は、コンセプトを「学びあい、認めあいながら、地域全体でつくる健幸、活躍、共生のまちづくり」として、町内全域で既存資源を活用しながら事業を推進しています。

早稲田大学との連携による「世界一健康寿命の長い町」を目指した取り組みや、地域住民自身から1対1で学ぶ「南伊豆暮らし図鑑」など、同町の大きな資源でもある湯量豊富な温泉を活用した交流人口の拡大にも努めてみえます。